

(体育科)

豊かに関わり合いながら、高め合う学習の創造 —体育科(体づくり運動領域)の学習を通して—

大阪市立天王寺小学校 松村 聖也

1. 研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標「確かな学力を確立し豊かな心とたくましいからだをはぐくむ教育を創造する」を設定し、学力だけでなく、体力・運動能力の向上を図る取り組みを行っている。

本校の児童は、休み時間や校庭開放の際に、積極的に運動に取り組む姿が多く見られるが、一方で新体力テストの結果を見ると、男女とも大阪府平均や大阪市平均を下回る項目が見られる。

研究主題は、「豊かに関わり合いながら、高め合う学習の創造～体育科(体づくり運動領域)の学習を通して～」とした。ここでいう「関わり合い」とは、友達・運動・指導者のそれぞれとの関わりのことである。また、「高め合う学習」とは、友達同士で運動の様子を見合ったり、学び合ったりすることを通して、動きの幅を広げたり、動きの質を高めたりすることである。児童がこれまで以上に関わり合いを深め、自分たちで学びをつくることができるような学習展開を目指し、研究を進めていくことにした。

2. 研究の趣旨

そこで、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、友達との交流を通して様々な運動につながる基本的な動きを身に付け、それを高めることを目指し、本校では、令和2年度に体育科の「体づくり運動」を研究領域に設定した。

研究2年目の令和4年度に「指導者の働きかけ」と「場の工夫等」の視点を踏まえ、研究主題を「楽しく学び合い、高め合う授業の創造～体育科(体づくり運動領域)の学習を通して～」とした。この研究主題を設定することで、単に主体的に学び合うだけにとどまらず、楽しさや心地よさを味わいながら活動すること、さらに友達との対話を通して「分かった」「できた」をより高めることを重点的に、授業づくりを行った。

こうした研究の成果と課題を整理・分析した結果、ほとんどが「学習過程」における指導工夫であることが分かった。したがって、研究3年目である令和5年度は研究の視点の一つを「学習過程の工夫」と変更し、研究主題を「豊かに関わり合いながら、高め合う学習の創造～体育科(体づくり運動領域)の学習を通して～」と改めた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 学習過程の工夫

- 場の工夫
- ICT 活用の工夫
- 学習カードの工夫
- グループ編成の工夫
- 学習評価の工夫

視点② 指導者の働きかけ

- 発問や個別の声かけの工夫
- 学び合い、関わり合いを個別にどう取り上げるかの工夫
- 振り返りを次時の学習に生かすための工夫
- 動きのコツを言語化するための工夫

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 体ほぐしの運動を毎時間取り入れることで、運動量を確保することができた。
- 低・中学年における、多様な動きをつくる運動（遊び）では、様々な種類の用具を用意し、児童が自分でその中の用具を選ぶようにしたり、グループで考えた動きを言葉や見本を見せて共有する時間を学習の中に位置づけたりすることで、児童が友達と活発に交流することができた。
- 高学年の巧みな動きを高めるための運動では、グループ編成を工夫することで、児童の学び合いを活性化することができた。
- 「体のどの部分をどのように動かしているのか」「どうしたらよい動きになるのか」など、児童に発問することで動きのコツを見付け、言語化することにつなげることができた。
- ICT 器機を活用し、児童一人一人のめあてをプロジェクターで一覧表示にして学級の全員で共有したり、新しい動きをする児童の様子を写真や動画で蓄積したりすることで、友達のがんばりを認めたり、指導者がねらいとする動きを児童が身に付けたりするなど、学習を一層深めることができた。

(2) 今後の課題

- 全体で動きを共有する際に、もう少し時間を確保し、児童の動きを広げたり、高めたりすることができるようになる必要がある。
- 「なんとなくできた」から「いつでもできる」の段階まで引き上げるために、学習過程を再検討する必要がある。
- 低・中学年における動きのコツの言語化では、「いつ」「どこで」「どのように」体を動かしているのかというポイントに絞って発問したり、オノマトペを活用したり、あるいは選択肢を設けたりすることで、コツの言語化をより一層進める必要がある。
- 高学年の巧みな動きを高めるための運動では、基本の動きを基にし、そこから動きの質を高めたり、児童が自分たちで課題解決できたりするための指導の工夫が必要である。